

平成 20 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005 - 2008

課題番号：17520151

研究課題名（和文） モダニズム文学の身体表象のパラダイムに関する理論構築

研究課題名（英文） Theorising the paradigm of the representation of the body in literary modernism

研究代表者

田尻 芳樹 (Tajiri Yoshiki)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号 20251746

研究成果の概要：モダニズム文学における身体の表象について、できるだけ整理した見取り図を提示することを試みた。その結果、サミュエル・ベケットとその周辺のモダニスト作家たちに関して、身体の断片化と再編成という中心的テーゼに基づいて分析し、新しい側面をいくつも浮き彫りにすることができた。また、19世紀後半から出現した新しいテクノロジーによって、身体と感覚がどう再編成され、それがモダニズム文学における人間の機械化とどう関係しているかについても多くの洞察を導くことができた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：モダニズム、身体、テクノロジー

## 1. 研究開始当初の背景

それまでサミュエル・ベケットを中心とするモダニスト作家たちの身体および感覚の表象を、19世紀後半以降に出現した新しいメディアやテクノロジー（電話、蓄音機、映画など）との関係で研究してきた。ベケットを中心とするその仕事を延長する形で、研究の

角度を部分的に変えつつ、モダニズムにおける身体表象に潜む論理にさらなる照明を当てることをめざそうとした。

## 2. 研究の目的

(1) モダニズムの文学、芸術において、コラージュやモンタージュの手法に代表される、断片化された異質なものの再結合という原理が身体表象にも当てはまるのではないかという仮説の下に、以下の諸点を明らかにすることを目的とした。

ベケットの作品における身体・感覚の断片化とその再結合がどのように表象されているかを精密に分析する。

その際、19世紀後半以降に次々と出現した新しいテクノロジーが身体と感覚に与えたインパクトに留意する。

ベケット以外のモダニスト作家や、他の芸術ジャンル（特に美術）も視野に入れ、上記の断片化と再結合という原理の重要性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) テクノロジー、身体、文学の関係についてマーシャル・マクルーハンやフリードリッヒ・キットラーなどの理論書を研究した。

(2) それと並行してサミュエル・ベケットを中心に、D・H・ローレンス、ウィングダム・ルイスなど英語圏モダニズムの作家たちのテキストを分析した。

(3) さらにより広く、同時代のヨーロッパの芸術や哲学に留意するようにした。

## 4. 研究成果

(1) まず中心的に取り上げた作家サミュエル・ベケットに関しては、計画通り身体と感覚の断片と再結合というテーゼに即して分析し、さまざまな新しい洞察を得ることができた。とりわけ、身体の機械化が断片と再結合に重なり合っている様を、イタリア未来派など同時代の芸術潮流との関連で明らかにできたことは特筆できると思う。また、マクルーハンやキットラーといったメディア論者だけでなく、デリダ、ドゥルーズ＝ガタリらの哲学理論やディディエ・アンジューの精神分析理論も参照し、ベケットにおける身体表象がいかに深く20世紀の先端的な芸術や思想とかかわりあっているかを詳しく解き明かすことができた。2007年に公刊した *Samuel Beckett and the Prosthetic Body: The Organs and Senses in Modernism* にその成果は結実した。本書はベケットおよびモダニズム研究に新風を吹き込むことができたと思う。

(2) ベケット以外のモダニスト作家にまで問題意識を広げ、D・H・ローレンスとウィングダム・ルイスという、ベケットより一世代前の小説家における身体表象を、特に人間関係の表象の機械化との関連で考察した。たとえば、ローレンスの主著『恋する女たち』やウィングダム・ルイスの『チルダマス』において顕著な人間関係の機械的還元は、人間身体の機械化という現象と、深いところで結びついていると思われる。このような問題意識に基づき、とりわけウィングダム・ルイスの作品における人間の機械化について論文を書いた（遠藤不比人ほか編『モダンの転回』（研究社出版、2008年7月）所収の論文「ウィングダム・ルイス『ター』における分身と反

復」)。初期の作品『ター』においてすでに、人間が機械のように表象されるというルイスの特徴が顕著であるばかりではなく、それと関連して、人物同士の関係に機械的反复の要素が見られる。さらに『チルダマス』では、映画的手法が大々的に取り入れられるほか、人物も二人組にまで簡素化し、この点がベケットとの類似を生じさせる。ルイスとベケットはあまり比較されることのない作家だが、人間身体や世界認識の機械化、またその具現形態としての二人組の多用といった点で見逃せない共通点があり、これらを明らかにできたのは独創的な成果だと思う。この点については林文代編『英米小説の読み方・楽しみ方』(岩波書店、2009年2月)に所収の第2章「モダニズムと植民地主義 - - コンラッド『闇の奥』」および第3章「モダニズムと人間の機械化 - - ウィンダム・ルイス『チルダマス』」で考察した。

(3) 上記の2点はともに国内はもちろん、国際的に見ても独創性のある成果だと思われる。ベケット研究では国際的に見てもあまり注目されてこなかった側面に正面から切り込んだし、また(2)で述べたベケットとウィンダム・ルイスの類似という問題は、海外の研究者も誰も深く追求していない。今後は、今回の成果をふまえた上で、人間関係の機械化の問題、特にベケットとルイスにおいて顕著な機械的な二人組の問題について、それがモダニズムのいかなる原理と関係しているのかを解き明かしてゆきたい。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Yoshiki Tajiri, "Samuel Beckett et la mécanisation d'Echo". *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui*, Vol.17, 2006, pp. 435-447. 査読あり

[学会発表](計 2 件)

Yoshiki Tajiri, "Samuel Beckett et la mécanisation d'Echo", Colloque <Présence de Samuel Beckett>(2005年8月2 - 11日)にて発表、Cerisy-la-Salle、8月9日。

田尻芳樹「共感覚とモダニズム」、日本英文学会第77回大会、シンポ「感覚、テクノロジー、モダニズム」(司会 = 林文代、他の発表者 = 林文代、武藤浩史、堀潤之)にて発表、日本大学文理学部、2005年5月21日。

[図書](計 4 件)

林文代編『英米小説の読み方・楽しみ方』(岩波書店、2009年、共著、pp.25-60)

遠藤不比人ほか編『モダンの転回』(研究社出版、2008年、共著、pp.51-69)

Yoshiki Tajiri, *Samuel Beckett and the Prosthetic Body: The Organs and Senses in Modernism* (Palgrave Macmillan, 2007), 216pp.

近藤耕人編『サミュエル・ベケットのヴィジョンと運動』(未知谷、2005年、共著、pp.34-52)

〔産業財産権〕  
出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田尻 芳樹(Tajiri Yoshiki)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号 20251746

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者